

ひとりの人間が一日に必要な水は約2リットルといわれます。その他生活に必要な水を合わせると日本での平均的な使用量は289リットルといわれます(国土交通省、トイレ10、食事関係で60、風呂200、シャワー60、洗濯100、洗濯(風呂の残り水を使う場合)50、手洗い・洗面6、など)。ヨーロッパでは150リットルです。そうすると日本に住むひとは、一年間にだいたい100m<sup>3</sup>くらい消費することになります。

ところで、パレスチナの水事情は深刻です。彼の地の水の問題(1)について、あまり報道されることがありませんが、1967年の中東戦争でイスラエルは、ヨルダン川の西岸に侵攻して、水の支配権を不当に獲得しました。1982年の国連の統計によれば、家庭で一人当たりの年間水消費量は、イスラエル人が75m<sup>3</sup>に対して、被占領地域のカザ地区のパレスチナ人では、35m<sup>3</sup>です。おなじカザ地区でもイスラエル人の入植者は二倍以上の85m<sup>3</sup>なのです。カザ地区のパレスチナ人の生活水は、イスラエル人の半分以下、日本の1/3なのです。一週間、いや三日だけでも日々の水の消費量を1/3に減らしてみれば、身にしみてその過酷な状況が分かるでしょう。すなわち水の問題は、日々の生活、いのちに関わる問題だということなのです。

今日の聖書箇所は、水をめぐる物語、生きる物語です。ヤコブの井戸に水を汲みに来たある女性をめぐって話は展開していきます。この女性は、シカルの町から3km以上離れているヤコブの井戸まで、おそらく毎日を汲みに歩いてくるのです。ロバもいよいよです。土でできた重い水甕が何かで連んでいるのです。

そこにイエスが、旅の疲れで座り込んで休んでおられたのです。井戸の前にたたずんでいたが、水を汲む器もないので、どうしたものか思案に暮れていたのでしょう。そうこうしているうちに、水を汲むためにやって来た女に向かって「水を飲ませてください」と呼びかけるのでした。

ところが女は「ユダヤ人のあなたが、なぜ水を飲ませてほしいと頼むのですか、わたしはサマリアの女なのですよ、」と問い返すのです。なぜならユダヤ人とサマリア人の断絶は、古くからのもので、根が深い差別があり、女は一瞬にして心を閉ざした、拒絶の心理が体中を駆け巡ったのでしょうか。この女性の心理は、差別を受けるひと、受けたいとしか深くは分らないものではないでしょうか。

イエスは、ユダヤ人の男であるけれども、相手が、サマリアの女であろうが、気兼ねすることなく親しげに水を飲ませてほしいと声をかけたのです。ところが、「わたしに関わるのは一切やめて下さい」といわんばかりの返事を受けて、イエスは、その堅く閉ざされた心を悟ったのでしよう。

このイエスと女の出会いに至るいきさつは、ユダヤ人によるサマリア人への差別という問題が深く横たわっていることが分かります。これを「サマリア人を差別するユダヤ人が悪い」、差別をする側が悪い」とだけで断罪してしまつては何ももたらさない…

これは日常よくある身近な出来事だと思いませんか？日々の労働に心身をすり減らしているところに、一目見て

わかるほど善良さそうなのにがたたずんでいる、そのひとが「水をくれませんか」と疲れているようだが、微笑みながら声をかけてきた、…とっさに「なぜ、疲れ切ったわたしに、見ず知らずのあなたが声をかけるのだ、」と反射的に怒りを放つ、ような場面がありませんか？こういう心理状態のひとつには、とりつく島がない

イエスは話しの論点をずらさなければならぬと思つたのでしよう。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた(いのちの)水を与えたことであろう、」と言われたのです。

この言葉も受け取りようによってはひどい嫌みとして響くでしょう。「あなたは、神のたまものを知らないので、『水を飲ませて下さい』と言ったわたしのことが分からない、だからあなたはわたしにいのちの水を与えることがない」と。

だから、その意を頭では理解しながら、女もまた、遠回しに嫌みともいえる言葉を返します。「あなたは水を汲む物を持っていないし、井戸も深い、だから水をくみ上げることもできない、あなたは『いのちの水』をわたしに求めるだろうと言つ、あなたは、わたしたちサマリア人の父祖ヤコブよりも偉いのか」と。つまり、「わたしが心を開く相手は、ただ一人、わたしたちの父祖であるヤコブ、そこから湧き出る水だけが、わたしの心の支えなのです、」と言っているのです。

「この井戸は、ヤコブ以来、その一族、子々孫々、家畜も、今に至るまでわたしたちサマリアに生きてきた人たちがすべてが、日々を生きたためにこのヤコブの井戸から水を汲み続けています。」彼女は自分のルーツ、歴史を語っているのです。「それがわたしのいのちの水、生きる支えなのだ」と言っています。

このいのちを削って紡ぎ出すような言葉に、イエスは圧倒されたのだろう、「この水を飲む者はだれでもまた渴く。」

この「渴く」という言葉を後にイエスは三回ほど語られる、ひとつは(4:37)「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」最後に、(19:28)「その後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渴く』と言われた。」です。

この言葉(VII XXギリシア語:dixaw / ハブライ語:dax)の意味は、「ギ」強く、何か、目標、終わりを求める / ハブ)かかと、足跡、終わり」というのですから、「あなたはいのちをかけて何か大切なものを求めているですね」「しかし、それは過去に受け継がれてきた正しさに、執着しこだわりを捨てきれないで、終わりを求めているのではないのですか。そこにすがりついている限り、再び生きる支えを失うだろうと言っています。」

だからあなた自身も、あなたの同胞サマリアの人たちも、繰り返し、挫折し、その都度、信頼する相手をとっかえひっかえしてきたのではないのですか。

この物語から、キリスト者は異教からキリスト教への改宗のメッセージを読み込みがちですが、この使信の本旨はそこにはありません。もしもキリスト者が自分の過去の経験に基準をもって生きているなら、「あなたは再び渴く」と言われるでしょう。

むしろ問題は、生きているいのちの水、生きて働く神と出会っているかというところにあります。イエスのサマリヤの女への招きは、限りなく優しいのですが、また限りなく厳しいのです。その厳しさは、これまでの過去、大切にしまっておきたい、甘い思い出も、二度と味わいたくない苦い経験も、その一切を、今あなたが捨て去ることができるといふ問いだからです。

足跡(ヤコブ) マーガレット・パワーズ  
ある夜、わたしは夢を見た。

わたしは、主とともに、なきさを歩いてきた。  
暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。

どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。  
ひとつはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、  
わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。  
そこには一つのあしあとしかなかった。

わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。  
このことがいつもわたしの心を乱していたので、  
わたしはその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、

わたしと語り合ってくださいると約束されました。…  
よき思い出としての過去

それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、  
ひとつのあしあとしかなかったのです。

いちばんあなたを必要としたときに、  
あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、  
わたしにはわかりません。」…苦い経験と甘い思い出・執着から誤解…過去

主は、さざやかされた。

「わたしの大切な子よ。  
わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。

ましてや、苦しみや試みの時に。  
あしあとがひとつだったとき、  
わたしはあなたを背負って歩いていた。」…現在

生きている水、いのちの水をイエスから与えられる、生きて働く神に出会い遣わされましょ。



